

# 学校をつくろう！通信



## 第150号

学校の役割

その 127

日本列島の先住民族-Uchinanchu と Ainu-の言葉、歴史、文化、伝統等をカリキュラムに組み入れた学校法人雙星舎の学校作りにご協力下さい。

モシリナァスコーレ設立準備会  
会長 星野人史

私が生徒、スタッフ、講師の方たちと作る小さな学び舎、珊瑚舎スコーレ(Sangosya-Schole Little schole on the coral)は2001年、沖縄県那覇市に開設されました。沖縄の先住民族-Uchinanchu-の言葉、歴史、文化、伝統などをカリキュラムに取り入れたフリースクールです。初等部、中等部、高等部、夜間中学校(主に学齢期を過ぎた義務教育未終了の方々対象の夜間学校で開校当初の生徒は沖縄戦の戦中、戦後の混乱と貧困のため小中学校に通えなかった方々が殆どでした)の4課程があり、NPO法人が運営して来ました。

2021年4月、学校法人雙星舎(Sohseisha Double star cottage)を設立し、高等部はNPO法人から学校法人の運営になりました。それに伴い高等部はフリースクールから法制上の学校になりました。校舎も那覇市の街中から南城市の海辺に移転しました。初等部、中等部はカリキュラム編成などの自由度が高いフリースクールのままNPO法人が運営していますが、高等部と同じ校舎で活動しています。夜間中学校も2023年から学校法人雙星舎が運営する計画で、沖縄県に設置認可申請中です。認可されれば日本で初めての私立の夜間中学校になります。

高等部と夜間中学校は学校法人の運営になってもカリキュラム編成上の自由度は損なわれず、従来通り沖縄の先住民族の言葉、歴史、文化、伝統などをカリキュラムに組み入れています。昼間活動する初・中・高等部の全生徒数は70名、夜間中学校の全生徒数は42名、全体で生徒数110名程の小さな学校ですが、この小ささに雙星舎の学校作りに対す

る考えがあらわれています。それは学校教育の中核である授業を「生徒ひとり一人が主人公」の場として作ること、生徒、スタッフ全員が互いを固有名詞で呼び合える規模の学校、つまり「他人がいない学校」をつくることです。

学校法人名の雙星は二つ星、舎は小さな建物を表します。「ふたつ星のように輝く二つの学び舎」という意味です。日本列島の南と北、沖縄と北海道で輝きを放つ二つの学校を表しています。どちらもかつて先住民族が生活の地とし、独自の文化を作り上げてきた土地です。

近代国家の日本はその地を併合しました。彼らは差別、抑圧の対象となりました。言葉を奪われ、文化、伝統、習慣なども蔑ろにされた歴史があります。現在も彼らに対する差別は存在しています。文化国家を自認する日本は先住民族に対する過去を直視し、蔑視の目から敬意の目で彼らの文化の基盤となる様々な「観」、自然観や人間観、社会観や人生観などですが、その「観」を見つめ直す機会が必要です。その眼差しは、花綵(かさい)列島と呼ばれる日本列島をその名の通り、蔑視・差別・抑圧から敬意・交感・共生の花綵に相応しいものに変える力を持っていると思っています。眼差しの変容には小さな試みの積み重ねが必要です。その中でも最も必要なことは私たちの日常の中で先住民族の様々な「観」に向かい合うことです。

雙星舎が学校名に使っているスコーレはギリシャ語を語源とする「暇」の意で、スクールの語源ですが、その暇は自分づくりのための積極的な時間のことを言います。珊瑚舎スコーレは自己と他者が向かい合い、互いの変容を育む時間と考えています。校名に使う所以です。豊富な「スコーレ」が日常的に用意された場、その具現化がこれからの学校の姿と珊瑚舎スコーレは考えています。とりわけ10才前後からの10年間程の学び、異質な他者と場を共にする授業、教材化する先住民族の「観」もその可能

性を備えています、そこには人間の宝物が埋もれている、そこそが学校だと私は考えています。

私は私財を20年余りの沖縄の学校作りに使ってきました。残りは雙星の一つ、北海道に作る学校、モシリナスコーレ設立のために使いたいと考えています。モシリはアイヌ語で大地、ナアはウチナー口で庭、大地の庭に建つ小さな学び舎という校名の学校です。二つの課程を開講する準備をしています。一つは昼間開講するモシリナスコーレ義務教育部(法制上の中学校とフリースクールの小学校)、もう一つは夜間に開講する星観(ほしみ)中学校(学齢期を過ぎた義務教育未修了者対象)です。昼70名、夜42名、合わせて全校生徒定員112名の小さな学校です。

校舎は雪国の特性を考慮したSDGsに基づくエコシステムで設計されています。壁や床などの内装、机、椅子、家具類もすべて木製の校舎です。校庭には畑や農作業のための小屋などがあり、一見すると、どこかの国にありそうなどとも大きな木造農家のような外観の学校です。冬は雪深い所ですから雪対策も講じなければなりません。南の沖縄で作る学校よりも建設費はかさみます。

しかし、私に残された貯えは1億円程度です。校地取得とその他の費用に当てなければなりませんので、モシリナスコーレ開校の資金としては全く十分な額ではありません。様々な方のご支援が必要です。校舎建設(3億5千万円)と設立認可(設立後2年間の運営資金のための預金残高証明)のためには現時点で計4億円の資金が必要と考えています。コロナ禍やウクライナ侵攻で物価高騰の折、見積りにも不安定要素が多いですが、大勢の方々のご援助を心からお願い申し上げます。

#### ※寄付金の振込先

- ・琉球銀行 与那原支店 (普)700045
- ・北洋銀行 旭ヶ丘支店 (普)0249501
- ・郵貯銀行 記号17030 番号18981501

#### ※名義は3行とも

モシリナスコーレ設立準備会 会長 星野人史

※このご支援の呼掛け文は英訳を前提に書いたものです。「学校をつくろう！」の読者の方にも是非お読み頂きたいと思い掲載しました。以下、本来の「学校の役割 その127」です。

珊瑚舎スコーレ・波打ち際博物館の第1回公募企画展「天空の波打ち際」が夏休み中、休館日なしで開催されました。実行委員会の生徒が目標にしていた入場者100名を優に超えました。ご来館いただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。今、実行委員会の彼らは図録づくりに精を出しています。ほんと、よくやります。ご苦労さん！です！！

この「天空の波打ち際」は谷川俊太郎さんの詩、「かなしみ」をもとに企画されたものですが、珊瑚舎スコーレのオリジナルミュージカルの上演が5年に1回開催されるように、この「天空の波打ち際」も企画展として例えば3年に1回、恒常的に開催したいと感じました。8歳から18歳の間に生徒たちの「かなしみ」の読みはダイナミックに変容すると思うからです。自分や在校生の感性・知性の変容を目の当たりにすることができるでしょう。生徒以外の様々な方々からの応募作品も大変ありがたいものです。自己観照、人間観照の機会になります。

珊瑚舎スコーレに対する谷川俊太郎さんのご好意も忘れてはいけないことだと思っています。第1回まれ人講座のまれ人にお招きし、会場の皆さんと八連句(珊瑚舎が教材として考えたオリジナル形式)を巻いた時の発句と執筆(宗匠、捌き)をお願いしました。「<sup>たね</sup>種子運ぶ 風はまれ人 土はきみ」。その時頂いた発句です。この発句は開校5周年記念上演ミュージカル「月夜の相対性理論」のモチーフになりました。因みに挙句は僕の「がじゅまるのひげのびろよのびろ」を執筆の谷川さんが採りました。うれしかったです。また、「生きる」の珊瑚舎バージョンにも谷川さんは書簡で参加して下さいました。今回の「天空の

波打ち際」展にも温かみのあるメッセージを頂いています。学校案内には開校当初谷川さんから頂いた珊瑚舎へのメッセージが掲載されています。珊瑚舎スコーレが大切にしなければならないご縁を頂いた方です。このご縁を形に残したいと思います。

「かなしみ」に話題を戻しましょう。人の感情を喜怒哀楽の4文字で言い表しますが、「哀」とされる感情、「かなしみ」に僕はとりわけ関心を持っています。喜怒哀楽は中国の古い書物に登場する言葉ですが、「哀」の成り立ちは「衣」と「口」の会意で、死者の衣に口を押し付け、かなしむ様を表しています。肉親などの死と向かい合った深いかなしみです。同じかなしみでも「悲」は離れ離れで1つにならない心の状態、心乱れている様子を表します。「愛」もかつては「かなし」が当てられていました。「哀」、「悲」、「愛」という主に三つの漢字を「かなし(い)」と同じ音のやまとことばに当時の日本の人々は置き換えました。激しく心が揺さぶられる状態を指すのが「かなし」でした。喜怒哀楽は詰まるところ「かなし」だったと僕は受け取っています。

「おもしろうて やがて悲しき 鶺鴒かな」芭蕉の句です。鶺鴒見物の面白さの向こうに潜んでいたかなしみが炙りだしのようによび上がるのです。それは命が背負うかなしみです。鶺鴒と鶺鴒匠、その仲立ちをさせられる鮎、そして芭蕉自身、さらにそれは人として生きなければならない命のかなしみを炙りだします。櫓の音、篝火の明暗、見物客の騒めきその向こうに広がる闇、森羅万象がかなしみの底に命を沈めます。「かなしみ」は谷川さんが17,8才のころ書いた詩です。瑞々しい感性と知性を感じます。「僕」のかなしみは「とんでもないおとし物をしてしまった」という喪失感から生まれたものだと「僕」は受け取ろうとします。でも、それはおとし物が理由ではないのです。自分という存在を否応なしに引き受けざるを得ない理不尽に気づくと同時に訪れる茫漠とした不安と孤独がもたらす「かなしみ」だと思っています。(ほ)

## がじゅまる しんかめちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

\*去った7月30日(土)に前期の学習発表会が行われました。前号では高等部の舞台発表から作品を乗せました。学校行事は全て自(G)準備、自(G)作、自(G)演、自(G)片付けまでの4Gを合言葉にみんなで作ります。初めて参加をする生徒も何回目かの生徒も、お互いが気持ちよい空間を作る為にはどうしたらいいのか、話し合いながらこの学習発表会を創ります。終わってみての初等部生徒の声をご紹介します。

### 「前期学習発表会「まにまに祭」の感想」

初等部 漢那 鈴

わたしは「まにまに祭」はとても楽しくできたと思います。なぜならみんなで協力しあって問題とかもみんなで解決しました。どうゆう問題かという、たとえば「ウチナー口」講座の出し物を決める時に、決まらなくてこまりました。多数決で決めるのはいやだったので一人一人の意見を聞いて決めました。がんばって出来たまにまにまに祭は達成感があってとても楽しく出来ました。

改善点は、「まにまに祭」準備の時に、スマホをいじってた人がいたから、ちょっと準備のスピードが落ちてたから、そこをなおしたいです。もしスマホとかを見ずにやっていたら、もっとすばやく出来ていたと思います。

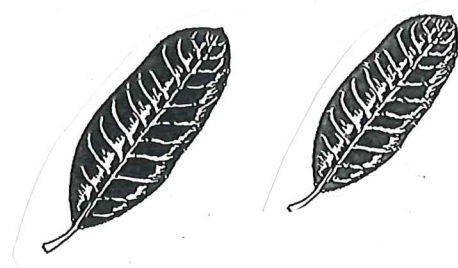
最後にわたしは、かぜで直前まで休んでいました。けどみんなが、立ちいちとかをわたしの分までよういしてくれて、とてもうれしかったです。次はうりづ

ん庭(後期学習発表会)だからかぜをひかず、改善点もなおしながら、がんばりたいです。



まにまに祭・初等部「数と記号～多面体を折る」

## ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

### 初等部「人間の営み」担当&結塾J&Sスタッフ

上原 龍太朗

はじめましての方もいると思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。私の名前は上原龍太朗、みんなからは、たろーと呼ばれています。生まれ年は三碧木星です。

普段は珊瑚舎スコールの運営する結塾で勤務しています。アルバイトの時も含め、およそ9年働いています。珊瑚舎でも、3年前から初等部の人間の営みを担当しています。

私が2つの場所で働きながら感じた、または考えていることの中から1つ、ここでお話しさせてください。それは、生徒にも有給休暇のような制度があればいいなと言うこ

とです。

私は結塾で、生徒と講師が力を発揮しやすい場所づくりの準備をします。珊瑚舎では、授業の準備をします。その為、現場に来たら生徒が休みという場面になる事は経験しています。心の中で『なんでやねん』と、ツッコミを入れていました。生徒の顔を想像し、どんな会話や場のやりとりになるかを考えながら材料を準備するので、一人でも欠けたら成り立たないという思いがあります。その為、生徒が体調不良以外で休む事に対して、まだまだ微妙な空気が流れるのも少しは理解出来ます。

珊瑚舎の生徒は、毎年馬天ハーリー大会に参加しており、本番に向けて特訓します。知っている方がほとんどとは思いますが、生徒は皆、その特訓から気合が入っています。体力には自信のある私ですが、ついていくのに精一杯です。(ついていけていると思っ込んでいるのかも知れませんが…)

ただ、疲れが出るのは大人だけではありません。前大会での反省や、先輩達からの想いを背負って立つ現役生は、一段と気合を入れて特訓に励んでいます。そんな中、1人の生徒、確か当時高等部の生徒が、『(ハーリー練習の翌日)月曜日、有給ください』という発言が耳に入りました。実際に翌日休みを取ったかどうかは分かりませんが、この一言が『生徒側にも有給があつたらいいのに』と考えるきっかけになりました。

結塾では、放課後の学習支援として補習塾をしています。学校へ行き、部活がある子は部活の後に結塾に来ます。しかし中には、塾が開いている2時から来て勉強している子もいます。在籍校では不登校となっている生徒達です。そんな中、中2の生徒同士の会話で、  
「A:〇〇なんで学校こないの？サボりだサボり」  
「B:〇〇はサボってるんじゃない！ちゃんと家でも塾でも勉強してるじゃん！しんどい時はAも学校休んでいいんだよ。無理して学校行っても勉強にならないじゃん！」  
AもBも〇〇も、小学校からの仲良しです。

学校へ行く、休む理由は十人十色。

働いている人は、有給休暇があり、減給はありません。同じように、学校を休んでも遅れを感じないような制度があれば、窮屈な思いをせず、あるいは家族との時間が増えたり、自分が取り組んでみたいことなど、有意義な時間をつくる新たなきっかけになるのではないかと考えます。

なぜ学校へ行くのか、その生徒たちの疑問と一緒に考えていくことを、今後も続けていきたいと思います。



## ～学び舎の一風景～

2022年度の夏休み、さほど落ちる事のないコロナ感染者数を見ながら迎えました。それでもボチボチ、実際に遠出する旅やご近所への旅に出たりする生徒達も出てきました。もちろん架空の旅を楽しむ生徒もいます。今年の旅の報告会もまた新たな生徒達の一面を垣間見る時間でした。そんな時間を一緒に過ごすことこそ、「旅の時間」のような気がします。



### 「9月11日旅の記録」 高等部 横川 天南

私は床が崩れ落ちて、吹き抜けになった30階建てくらいのビルにいた。コンクリートの天井や床や壁はほとんどぶちぬけて、街と青空を一望できる。内部は植物に侵食されて綺麗なところだ。

ここは建増しを繰り返した珊瑚舎だと分かった。みんなもいて、まにまに祭の準備をしている。巨大な看板を貼り出したり衣装を作ったり、楽し気な雰囲気だ。そのとき小型飛行機がビルの上を通過し、大量のビラをバラ撒いていった。屋上の大穴から降ってきたその紙には、後ほどここを襲撃しに来ると書いてある。私たちは屋上に3台あるミサイル発射台の元に集まり、厳重に警戒した。

しばらくして気付くと2kmほど先に11体の影がある。よく見るとメロンパンナちゃんやカレーパンマンなどの巨大なアンパンマンキャラ達の着ぐるみが横一列に並んでおり、それらが一斉にこちらへ向

かって走りだした。すごい足音と速さであつというまにビルにたどりつき、サルのように身軽な動きで登ってくる。4体ほどが屋上に現れた。みんなそれらにつかまれ、乱暴になげつけられていく。

私は必至でぐり抜け、下の階へ向かった。しかし、いつのまにか水がたまり、ビルの内部が深い湖になっていた。6人くらいの生き残りで壁にかろうじてくっついている階段に集まった。一緒にいられてよかった、と言ってみんなで飛び込もうとしたとき、壁を登って突然現れたどーも君の着ぐるみにつかまれ、湖にたたきつけられて、私は溺れ死んでしまった。しかしまた死ぬ前の瞬間にもどっている。下からどーも君が軽々とはい上がってくるのが見える。ふせぎようもなくまたつかまれ、投げつけられた。そうして死ぬのを4回ほど繰り返し、とっても怖かった。

そこで目が覚めた。なんだ、夢だったのか。早くまにまに祭の看板作りの続きをやらないと。釘を打っていたとき、小型飛行機が屋上を通過した。大量のビラが青空を舞って降ってきた。これからくり返すことは分かっている。もうあんなに怖いのは嫌だ、どうしよう?!逃げたいけど、逃げれない!

長くて怖い夢からさめるとき、帰ってきたような気分にはなりません。日常の幸せを心から感じる事ができるので、たまにはこんな旅もいいと思います。



### 「2022ぐしょーからの旅

#### ～ソーロンアンガマに参加して」

高等部 宮良 鼓道

アンガマとは八重山地方に伝わる旧盆の伝統行事です。ウシュマイ(お爺さん)とンミー(お婆さん)という、ご先祖の霊の象徴がファーマー(子や孫)を

引き連れて仏壇のある家を回って、踊りやとんち問答を披露します。アンガマ達はグショーと呼ばれるあの世からやってきて、お盆の3日間をこちらの世界で過ごします。その間生きているものは、仏壇にたくさんのお供え物をしてご先祖様をおもてなしします。いわば、あの世とこの世が交錯する3日間です。僕は、アンガマ行列のファーマーとして、あの世からの訪問者の立場でこの3日間を旅しました。プログラムは大体、次の様になっています。

\*道歌

\*線香踊り(アンガマ)

\*その家のご先祖様にウートートー(アンガマ)

\*無蔵念佛節(アンガマ)

\*踊り(ファーマー)ととんち問答(アンガマ)

\*六調節(モーヤー)

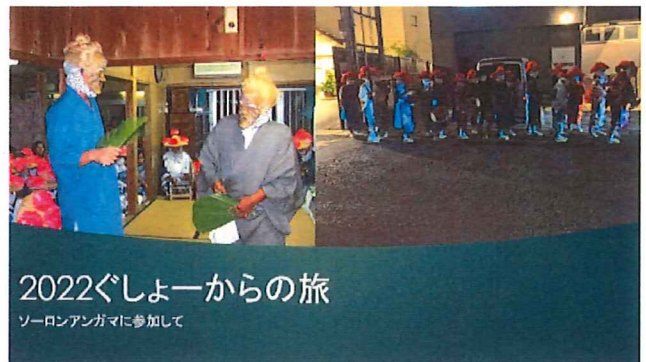
\*道歌(見ている人も呼ばれたら出て踊ります)

お盆の3日間に加えて、ウンケー(お迎え)の前にスクミ、ウークイ(お送り)の次の日にトゥズミという儀式があります。アンガマ達は3日間、それぞれの場所で儀式を行います。

ファーマーは5つの赤い花がついたクバ笠をかぶり、目から下はサージを巻いて顔を隠しています。だから、視界が狭くなります。その狭い隙間から見える世界はまるであの世からこの世をのぞき見している気分でした。それに加えて何度もループして聞こえる道歌のしらべやアンガマの裏声は、あの世とこの世の堺が薄くなるようすごく神秘的でした。ファーマーになることで、いつもとは違う角度から街を見ることができました。

ウークイの翌日は公民館でトゥズミが行われます。ウークイで帰り損ねた霊達を最後に送り返す意味があるようです。ファーマー達は、あの世のものと間違えられないように顔を出して踊りを踊ります。ウシユマイとンミーもみんなが踊りを終えた後に面を外して人間に戻ります。僕もグショーからの旅を終えたこの世の日常に戻りました。ファーマーとして過ごした3日間で、八重山の人々の見えない物を大切

にする気持ち、細やかな心遣いを感じました。来年もまた参加したいです。



## 波打ち際博物館 第一回企画展『天空の波打ち際』

8月13日から9月4日の23日間(最終日は台風に見舞われ休館となりました)、大勢の方に訪問いただきました。北海道の方から送られてきた作品をかわぎりに、珊瑚舎の生徒達はもちろん、卒業生や珊瑚舎に関わりのある方々から展示作品を送っていただきました。ご協力ありがとうございました。毎日交代で実行委員はじめ保護者からなるキュレーター(博物館学芸員)が常在し、展示作品の案内をしました。そうした時間を過ごした生徒実行委員と保護者キュレーターからの感想です。(紙面の関係で各1名の紹介となります)



## 「好奇心」

中等部 折尾 葵 (あとむ)

人間は好奇心の塊だと私は思う。

それが、ただの好奇心で終わるのか、その好奇心を糧にして新たな一歩を踏み出すのか。その二つの間を人間は器用に、生きている。

私はそんな「好奇心」に駆られ、普段だったら絶対にやらない実行委員をやることにした。

実行委員は思ってたよりも大変ではなかった。去年に修学旅行の実行委員をしたことがあり、その時は一から自分達で修学旅行のアイデアを決めたりしていたからだ。

今回の波打ち際博物館の実行委員は天空の波打ち際展の内容は決まっていたから大変ではなかった。

しかし、それは私が自ら行動していないからではないか、と思った。

例えば、谷川さんに送る手紙を書くとき、海と私が担当だったが私はその時テンションが上がる時期で、海がほとんど手紙を書いてくれた。いや、ほとんどではなく、海が書いてくれた。私は手紙を書いている海の隣で笑い転げ回っていた。その事は本当に反省している。

こんなこともあり、私は冷静になった。笑い転げるのはやめた。

そして、私も自分のやりたい事を見つけた。それは、ポスター作りだ。

ポスター作りはテラと一緒に描くことになった。テラは3日後に北海道に行ってしまうから、3日でポスターを完成させなければならなかった。

私が下書きでテラが本書きというふうに分けたが、急ぎすぎたせいか私が一晩で本書きまでやってしまった。私はテラにその本書きまでされている絵を下書きできたよと言って見せた。

テラは「この絵をテラが本書きすると、葵の絵のイメージが崩れちゃうからこのままでいいと思う」と言ってくれた。私はテラを思わず抱きしめそうになった。とても優しい子だなと改めて理解した。

そんなこんなでポスターが完成した。その間に一人

の実行委員がやめるという事件もあった。

短い期間で色々なことが決まっていた。波打ち際博物館を開館する期間や、全国の文芸部のある学校にメールを送ること、キュレーターの募集、ポスターもそのうちの一つだ。

波打ち際博物館が開館する日に迫っていく。その緊張感を実行委員にしか分からない。

数ヶ月前の「好奇心」はただの好奇心だったのか。今では判別もつかない。

多分私は、ただの「好奇心」ではなかったと思う。だってほら、こんなに楽しいんだから。



## 「天空の波打ち際で見つけたもの」

眞喜志 陽子 (保護者キュレーター)

最近話題のシンパシー (sympathy) とエンパシー (empathy) ですが、どちらも「共感」と日本語に訳されるそうです。個人的にはシンパシーは同情に近くて、エンパシーには共感できない相手でもおもんばかるようなニュアンスがあるように感じています。「そうだね」と同調することは社会に所属して暮らすときには必要な能力だと思うけれど、「自分ならどうかな？」と考えることもとても重要な能力だと思うのです。詩に触れるということはその詩が書かれた景色の中に入り込み、自分もその眺めを見てみようとするのかなと思います。最初に「かなしみ」を読んだときは波打ち際で波音を聞くことしか

できませんでした。この詩が高校生くらいの頃に書かれたものだと知ったとき、ぱあっと明るい月の夜が広がりました。わたしの中にも似たような経験があったことを思い出したのです。

波打ち際博物館には「自分ならどうかな？」がたくさん並んでいて、それはわたしのものとも違い、いろんな感じ方に触れられてとても楽しかったです。そして心の中におぼろげに生まれた「自分ならどうかな？」を、見える物として提示できる皆さんの能力にもワクワクしました。感じて考えてそれを伝える、それって結構難しいエネルギーを使いますよね。尊いです。設営の日、諦めずに「自分の中に見える波打ち際博物館」を具体化しようと試行錯誤する生徒の皆さんの姿や、来場されたお客さんから聞こえた感想などは、お客さんとして関わっただけでは触れることの出来なかった一面だったなあと思ひ返したりしています。コロナに翻弄され、台風に振り回され、やっと作り上げた博物館は消えてしまいましたが、ビーチコーミングするように、次回はどんな作品が見つかるのかなと楽しみにしています。

## 子どもがんまり便り

9月25日(日)今年初めての「子どもがんまり」を開催しました。人数を限らせてもらった開催でしたが、切り出したユウナから好きな枝ぶりを選び、大人も子どもも楽しそうにパチンコを作りました。その感想は次回のお楽しみ！



## ★ ★ 事務局便り ★ ★

★昼間部は長期休みの前に3日間連続で「がんまり」の作業があります。夏休みを前に芒々と草が茂った「山がんまり」の草刈りを一気にやっ飛ばしておうと決めて、参加者全員が鎌と草刈り機を手に入れました。いつもなら暑い、だるいと文句がでるところですが今回は気合十分。使用後、使用前(作業のbefore-after)がはっきりと分かり、生徒達も達成感のあるいい表情をしていました。

最終日の午後は校舎前の「天の浜」で、泳いだり、綱引きをして楽しみました。

★夜間中学校で学ぶ生徒たちとボランティア講師のみなさんは学ぶことの大切さ、楽しみ方を分かっているのだと改めて感じます。夏休み後家庭の事情で2年続けられた方が辞めました。口には出しませんが途中で辞めざるをえなかったのは悔しかったと思います。不自由な足を引きずりながらもほとんど休むこともない方でした。入学当初は人前で話すことも遠慮がちでしたが次第に発表会でも堂々とした態度に変化しました。この方が辞めみんなも落ち込みましたが、少人数のクラスの活気は変わりません。仕事と掛け持ちでいつも始業時間ギリギリに駆け込むみんなですが今日もやろうね！という熱意があります。それを支えるのは講師の方々の存在です。

## ★ ★ ★

●今年度(8月1日～9月30日)寄付・カンパを頂いた方々  
石野裕子市野寿子大城喜春小渡律子鹿糠文子北上田登久子城間あずき当山幸江長嶺由紀子真津昭夫矢崎智章山田道子湯本貴和與儀勝子与那覇晴海石田みどり竹内新仲村宮子横山真弓萩原真美照本祥敬岩月住江三枝菜美子所扶久代手塚賢至大城博三浦幸子式部恵子森口美千恵丹羽雅代家門取一上田秀一盛口佳子橋川由美子助川寿美子武田富美子辰巳万里子安里桂子安田直美下地孝法岸曉美城間栄順村上呂理森田義之坂本新一郎砂川明俊上間陽子大垣千鶴西原邦男名嘉光夫泉恵子森下浩平赤澤龍太郎安田圭太郎野村佳雄奥本さつみ花城和子真栄城美佐江澤岷安英須田恵黒澤亜里子澤岷るり子嵩元のり子土橋待子上泉靖子 中地八重子廣川さえ子高橋恵美子

発行者 : 珊瑚舎スコーレ  
事務局 : 遠藤知子 樋口佳子  
住所 : 〒901-1414 南城市佐敷津波古 509-4  
Tel : 098-975-7781 Fax : 098-975-7783  
Mail : info@sangosya.com  
URL : https://sangosya.com